

識字学級に通う中国人渡日者の心理的援助の検討

— 転機の語りを通して —

河合 篤史*, 辻河 昌登**

(平成28年6月8日受付, 平成28年12月6日受理)

A study of the Mental Support for Chinese Immigrants Participating in Japanese Literacy Classes : Through Narratives about Students' Turning Points

KAWAI Atsushi *, TSUJIKAWA Masato **

The emphasis of this study is to show the possibility of mental support for students who have immigrated from China and have been learning Japanese in literacy classes, by examining how literacy classes can offer support in their lives, through four students' interviews. The narratives were obtained through semi-structured interviews and analyzed by using the framework method of life story study. From their narratives, it is learned that there were three distinct turning points for them: (1) when they decided to come to Japan, (2) after they started living in Japan, and (3) after they began attending literacy classes. Consequently, the narratives generated between the narrators and the listeners give hints as to ways we could mentally support the immigrants.

Key Words : supplemental literacy class, Chinese immigrants, life story, narrative, semi-structured interview

I 問題と目的

国際化が急速に進む日本では、来日する外国人は年々増加、2015年6月末の在留外国人者数は217万2,892人に達しており⁽¹⁾、日本が外国人との共生について今後益々考えていく必要があることを示している。しかし、多文化共生という言葉とは裏腹に、渡日者の現実には厳しく、過酷な個人史を経て生きているという現実がある。

このような状況の中で、渡日者が学ぶ場として「識字学級」がある。「識字学級」は、何らかの理由で学校に行けなくて文字の読み書きの不自由な人々が、成人してから文字の読み書きを学ぶ場であり、元々、部落解放運動の一環として始まった。しかし、近年その様相も変化しつつあり、「ニューカマー」と呼ばれる外国人が増加し、識字学級が「国際化」してきた現状がある。特に都市部においてこの傾向が顕著である⁽²⁾。

また、識字学級の「国際化」に伴って問題点も生じてきている。例えば、渡日間もない日本語も分からない状態でやってきた学習者に対する学習支援者の配慮のなさが、学習者を傷つけるという事例も報告されている⁽³⁾。これらの課題に対して山田⁽⁴⁾は、学習支援者が「対話」能力を身につける必要性を指摘し、“識字学級はすべての人のアイデンティティを守り、その人のままで受け入れる場である”必要性を述べている。また、福島⁽⁵⁾は、識

字学級について「よい居場所として重要な意義がある」としている。

このような過酷な現実がある中、江⁽⁶⁾や李⁽⁷⁾は、外国からの渡日者のメンタルヘルスが好ましくない状況にある現実があり、彼らのメンタルヘルスを維持・向上させる必要性を指摘している。これは、益々国際化する日本において看過できない問題である。これらに関連して、高等学校や大学の留学生を対象とした研究は、理論的研究だけでなく、事例を基にした、質的研究もなされてきている⁽⁸⁾⁽⁹⁾。

一方、「ニューカマー」と呼ばれる渡日者は日本経済を下支えする役割を担っているにも関わらず、日本の教育システムから切り離されたマイノリティである。そして、一條⁽¹⁰⁾は“日本では、主に外国人留学生を対象に研究が行われている”と指摘し、“学校に属し、組織的なサポートを受けることができる”前提でない外国人の適応に焦点を当てた研究の必要性を述べている。また、外国人労働者について李⁽¹¹⁾は、“メンタルヘルス上の問題は認識されているが、外国人労働者を対象とした支援および心理学的な研究はほとんどなされていない”現状を、大西⁽¹²⁾は、在住外国人の心理的援助について、“どのような課題があるか、またどのように課題に対応可能か具体的な議論は遅れている”と指摘している。さらに大西⁽¹³⁾は、コ

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

** ホワイト精神分析研究所 (William Alanson White Institute of Psychiatry, Psychoanalysis & Psychology)

コミュニティ心理学の視点から、心理的援助を行う上でコミュニティの成員の参加・協働の重要性を述べている。

この現状を踏まえ、河合⁽¹⁴⁾は、識字学級に通う一人の中国人青年に対してインタビュー調査を行ったが、さらに、彼らが識字学級に通いながら日本で生活を送っている現実に目を向け、彼らの生きる意味を明らかにしていくことは、時代的にも求められることであろう。そして、「学ぶ」ことの意味の本質を明らかにする一助となり、マジョリティに属し日本の教育を享受する者にとっても意義深いものとなると考える。

以上のことを鑑み、本研究では、識字学級に通う渡日者が、どのような心理的プロセスを経て日本で生きていく人生を選択するに至ったのかを丁寧に聴き、彼らの人生の中で、識字学級をどのように意味づけるのかを検討し、渡日者の心理的援助の可能性を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. ライフストーリー研究

本研究ではライフストーリー研究法を用いることとした。ライフストーリー研究とは、「日常生活で人々がライフ（人生、生活、生）を生きていく過程、その経験プロセスを物語る行為と語られた物語」（ライフストーリー）についての研究であり⁽¹⁵⁾、質的研究に該当する。そして、人々が物語る時には必ず聴き手が存在する。話し手と聴き手の間で紡ぎ出される物語に意味があり、やまだ⁽¹⁶⁾は“語り手と聴き手によって共同生成されるダイナミックスなプロセスとして捉えられる”研究としている。さらに、“人は出来事に出会うとき、「なぜ？」と意味を問う。病い、喪失、障碍、犯罪被害などより深刻な「なぜ、自分が？」という問いに直面することもある。そのとき、人々は出来事をつなぎ、ライフ（人生、生活、生）を物語（ストーリー）として構成しようと試みる。”とし、ライフストーリー研究とは“人々のこのような営みをそのままとらえようとする研究である”と述べている。また、桜井⁽¹⁷⁾は、ライ

フストーリー研究について“ライフストーリー研究が関心をよぶ理由のひとつは、調査する側からの要請というよりも、社会の側から要請されているからである。”とし、これまでの研究テーマになかった新しい社会問題の発生や、周縁にいて注目されなかった人びとへの関心の高まりが背景にあるとしている。このことに関連して、能智⁽¹⁸⁾は質的研究について、“単にデータが質的であることを特徴とするのではなく、むしろ従来の量的な研究において見落とされていたり軽視されていたりするものの見方やデータの扱い方の全体をさす”と述べている。本研究の研究協力者が、現代社会においてはマイノリティである識字学級に通う渡日者であり、質的研究であるライフストーリー研究法を適用する意義は大きいと考える。

2. 研究対象の識字学級

近畿圏にある識字学級である。週一回開催され、学習者のニーズに応じて個別学習を基本に行っている。運営責任者に研究の承諾を得た上でインタビューを実施した。

3. 筆者の立場

筆者は、教職に就きながら大学院博士課程で学ぶ五十代前半の男性であり、週一回開催される識字学級において、学習支援者（ボランティアスタッフ）として約一年通っていた。

4. 研究協力者

識字学級に通う中国人渡日者4名である。当該識字学級で筆者は、日本語の能力に応じて、学習者のグループ学習支援や個別学習支援を行っていた。各研究協力者との初回学習時、お互いに自己紹介をし、筆者の立場と研究の目的を説明していた。グループ学習および個別学習を行う中で、インタビュー調査を6名に依頼し、承諾が得られたのが個別学習支援を行った中国人渡日者4名であった。4名の研究協力者には、渡日期間が半年～20年とばらつきはあるものの、すべて母国中国の高等教育機関で学んでいること、文化的背景が共通することを鑑み、

表1 研究協力者のプロフィール

	年齢・性別	国	学歴	渡日期間	渡日経緯	職業
Aさん	30代半ば・女	中国	中国の大学(日本語専攻)	半年	配偶者の日本での就職	旅行業→専業主婦→最近工場アルバイトを始めた
Bさん	50代半ば・男	中国	中国の大学(英語専攻)	20年	配偶者(日系3世)の帰国	役人→貿易会社→町工場
Cさん	20代前半・男	中国	中国の大学(工業デザイン)	半年	日本の大学院への進学希望	日本語学校に通いながらアルバイト
Dさん	40代後半・女	中国	中国の大学(教育専攻)	15年	キャリアアップ・渡日後日本人と結婚	教育職→専業主婦→アルバイト

研究対象とした。インタビュー調査を開始する前に、研究への同意書を提示し、同意を得た上でインタビューを開始した。特に、論文作成時には、プライバシー保護の観点から、個人名はもちろん、個人特定に結びつく可能性がある特定の地域・事象等に関する匿名性が保たれるよう細心の注意を払った。研究協力者4名のプロフィールを、表1に示す。

5. インタビュー手続き

研究協力者に対して半構造化面接を行った。本法を採用したのは、渡日者といっても、年齢や渡日経緯は様々であり、伝統的な仮説検証の手法を用いて仮説を検証するのではなく、いくつかの事例を分析・検討することで共通性を見出す仮説生成的研究が適していると考えたからである。

面接では、大久保⁽¹⁹⁾に倣い、「現在の生活」「これまでの人生」「転機となった出来事」「これからの人生」に関わる問いかけをした。研究協力者の語りの自然な流れを尊重するため、面接時間には多少ばらつきが生じた(1人当たり120分～180分程度)。また、研究協力者の理解を得た上で、全ての面接をICレコーダーに録音した。

6. 分析

ライフストーリー研究の枠組みの基でシーケンス分析を行うこととした。ライフストーリー研究の分析法には、大きく分けて、カテゴリ分析とシーケンス分析がある。カテゴリ分析は、得られたインタビューデータを小さな単位にまで分解し、カテゴリ名をつけて整理し、グループ化し全体像を構成していく分析であり、KJ法やグランデッド・セオリー法がある。一方、シーケンス分析は、インタビューのデータの並び順や相互の関連など全体の形を維持したまま分析する方法である⁽²⁰⁾。具体的には、インタビューで交わされた会話を全て忠実におこし、文脈の流れを読んでいくことになる。

桜井⁽²¹⁾は“ライフストーリー研究とは、調査する一人

ひとりがインタビューを通してライフストーリーの構築に参加し、それによって語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することである”と述べている。また、やまだ⁽²²⁾は、“語りが語りをよび、循環的に共同生成されるところに重要な意義がある”としている。本研究のインタビュー過程がインタビュアーとインタビュイーの共同作業的な構築過程であり⁽²³⁾、研究協力者の語りだけでなく、筆者の語りを含む共同作業全体を分析・考察することが重要であることから、シーケンス分析を行うことにより、識字学級に通う中国人渡日者の内面に焦点を当てた。

また、分析枠組みとして、語り手の「転機」になる出来事に焦点を当てることとした。野村⁽²⁴⁾は“語りには時間的な断絶や矛盾をはらみ得る転機を橋渡しし、生活史に整合一貫性を付与する機能(cobherence)が想定されることが読み取れる”とし、転機の語りの重要性を述べている。また杉浦⁽²⁵⁾は“自分や他者に対する見方を大きく転換させ、時には世界を全く異なった視点から見えるようになること”を転機(turning point)と定義し、“転機は人生という大きなストーリーを大きく転換させる一つのストーリーである”とし、“人の人生のあり方や自己変容、生涯発達に大きな役割を果たしている”と示唆している。本研究でもこの考えを基に分析を進めていくこととし、研究協力者の「転機」となる出来事と心理的特徴を表2に示す。

III 結果と考察

研究協力者と筆者の間で紡ぎ出された語り(ナラティブ)を提示しながら、研究協力者のライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察する(語りについて、鍵になる言葉を囲みにより、特に印象的な語りを下線によって表記した。なおIはインタビュアーを示す)。

表2 転機となる出来事と心理的特徴

転機となる出来事	当事者の心理的特徴	A	B	C	D
渡日を決心したこと	渡日への期待	○	○	○	○
日本での生活	渡日後の落胆	○	○	○	○
	生活に対する不安(言葉)	○	○	○	○
	家族の心理的支え	×	○	×	△
識字学級に参加	満足感・安心感	○	○	○	○
	未来への希望	△	○	○	○

○=該当する △=やや該当する ×=該当しない

1. 渡日を決めたこと

〈Aさんの渡日への期待〉

日本に対する興味 (1回目のインタビュー)

A: 自分は朝鮮族です。東北地方には朝鮮族が多いです。東北地方では、中学から英語と日本語のどちらかを選べるんです。私は日本語を選びました。…(略) それに、小さい頃から、アニメは日本のやっていたし…よく見ました。私の友だちの中でも一番人気がありましたね。

I: それもあって日本のことは少し興味があったんですか。

A: はい、それはありました。大学を卒業したら、日本に来て留学でもしようかと思うこともあったんですが。…(略) ちょっと日本で生活するのいいかと思って…留学も考えましたけど…4年の後日本にいますね(笑)

渡日後の現実 (1回目のインタビュー)

A: 主人が留学が終わって日本の会社で働くことになり…日本に来ることになった時、最初はうれしかった。自分も大学卒業して、来たいと思ってたこともあったので…

Aさんは中学から日本語を選択して学ぶことができた。日本語を学び始めたAさんは、次第に日本で生活することもいいなと感じていた。その願いが結婚を機に現実化した時、Aさんは喜びで満たされていたと想像できる。

〈Bさんの渡日への期待〉

エリートとしてのプライドと転職・実生活の不満 (1回目の語り)

I: エリートだったんですね。

B: はい。ですが、家が長屋みたいで…その頃、だんだん外国の資本が入ってきて、外資系の港関連の会社に入って5年ほど勤めた。収入は中国の人の3・4倍位はありましたが、家が…外資系でも、勝手にどんな家でもOKではなく、国が許可したところでないと住めなかった。マンションには入れたが、一つの家に2家族がいるような状態で、ケンカが絶えなかった。トイレやキッチンが共用だから、使う順番はどうこうと、そのうち、息子が大きくなってきて、部屋に机なんかを入れたら、テレビとかを入れることもできない…それでこのまま中国にいても…と思っていた。

エリートとしての自負もあり、英語の能力も認められ外資系の企業に転職することができ、高額な収入も得ることができたBさんだが、収入や社会的地位に見合った住まいが得られず、同居する他家庭との間で感じるスト

レスに、Bさんは中国で生活することに、未来への希望を持ってなくなってしまった。

渡日を決めたこと (1回目の語り)

B: そのころ、妻もホテルのマネージャーみたいなことをしていた。

I: 奥さんもエリートだったんですね。

B: はいそうなりますね。

I: 奥さんはおばあさんが日本人だということで日本に来たいとは思っても、Bさんはどうだったんですか。

B: 家のことがやはり先行き困っていたし、それに日本に行きたいと言ったら、勤めている会社に日本支社があって、日本に来て、仕事を探さなくてもよかったです。だから決心した。

妻の事情は考慮しても、自分の祖国を離れる葛藤は大きいものがある。しかし、中国での生活に希望を見いだせないBさんは、日本に戻りたいという妻の事情や、自分の仕事も保証されているということを追い風に、希望も抱いて渡日を「決心」したのだと推察される。

〈Cさんの渡日への期待〉

日本で学びたい (1回目のインタビュー)

C: 実は、中国の工業デザインのレベルは低い。それならもう少し勉強したい。中国の教育方法もあまりよくない。…その国の発展によって学問の発展状況がわかる。だから日本の工業デザインは発展している。中国の工業デザインは…専門の分野もあまりよくない。

面接前の個別学習の時、Cさんは筆者に自動車のデザイン画を見せながら嬉しそうに「男のロマンです!」と語ってくれたことがある。上記の語りと重ね合わせると、Cさんの、工業デザインを日本で学びたい、夢に向かって一歩踏み出したい、という意欲と期待が感じられる語りと言える。

〈Dさんの渡日への期待〉

やっと自分の人生を生きられる (1回目のインタビュー)

D: 次に、それなら外国に、それもアメリカに留学したいと思った。弟は国語の教師から今は警察の仕事をしていますが、弟も留学したいと思っていた。でも弟は奥さんと子どももいたし、私の方が留学しやすかった。でも母は“ダメ”と反対しました。一つのことをやり通すことが大切だと…その時私も仕事をしていましたから、それをやり切るこ

が重要と母は考えていました。そしてビザも下りなかった。それで、日本に変えました。

希望する仕事ができない状況になり、Dさんは留学を考えることになる。アメリカへの留学を考えた時「一つのことをやり切ることが大切」と語る母の言葉に対して、国を変えてでも自分自身の考えを貫こうとするのは、Dさん自身が自分の人生を歩み出そうとしている決意の表れなのだと考えられる。

2. 日本での生活

〈渡日後の現実の厳しさを語る A さん〉

渡日後の現実（1回目のインタビュー）

A：主人は留学が終わって日本の会社で働くことになり…日本に来ることになった時、最初はうれしかった。自分も大学卒業して、来たいと思ってたこともあったので…でも来た後は、寂しいものがありました。主人はいますが友だちはいないし、両親も遠く離れていて…日本語も上手にできない…それがちょっと何といたしますか（ハハ）、自分がしたいところはありますが、言葉が出来ないので、外には出られないので、何をするにも不便にで…なんかバカのように生活してるような…気持ちがあります。そんな時があります。その時は帰りたいです（アハハ）…はい。

結婚を機にあこがれていた日本での生活が現実化した時、Aさんは喜びでいっぱいだったということは想像できるが、インタビューでは、日本での生活については“最初はうれしかった”としか語っていない。それは、家族も友人もまわりにはおらず、日本語も分からずに生活しないといけない、それもほとんど外出をせずに「バカのように」暮らさなければならぬ過酷な現在の現実を圧倒されているためではないかと考えられる。

〈自然災害や言葉がわからないことによる苦難を語る B さん〉

渡日の希望を砕く自然災害（1回目のインタビュー）

B：来日後、大規模な自然災害が起こり、日本支社が閉鎖。事業復旧の目途も立たず、その頃は、まだ勤めて間もない頃だったので正社員じゃなかったこともあって、リストラになった。妻の収入だけでは暮らせないし、子どもを日本の学校にやるのは不安だった。言葉も分からないし、友だちもできないかもしれない。だから、中華学校に入れることにした。そうしたら、授業料もかかるし、仕事は何でもいいからしないとと思った。妻の兄はそのころ日本に来て長年経っていたから、一緒に仕事を探してくれて、やっと鉄工所に決まった。

その頃はまだハローワークがあるのも知らなかった。

生きるための仕事（2回目のインタビュー）

I：英語を生かせる仕事は探さなかったのですか？

B：やはり、英語がしゃべれても、日本語がしゃべれないから…貿易会社でも英語は必要だけど日本語がしゃべれないと仕事にならない。

B：日本で生活するには第1が日本語で、家族を養うためにはどんな仕事でもいい。0からでもいい。

I：今までのキャリアは使えない。0からでもと思ったんですね。

B：3年…4年近くそこに働いた。ここの社長はよかったんだけど…社長のお父さんがよく来て…仕事ができないので“おまえ帰れ”と言われた。今ならわかるけど、その時は言葉の通り思った。“帰れ”と言われたので帰った。社長は“何言うてるんや。”と言ったが、私も一度言ったのでこっちはメンツがあるから…。年寄りにけんかしてどうする。仕事もまだよくわからなかった。それで働きにくいこともあった。…（略）…だから最初の5年間はしんどいし、つらかった。

一大決心しての渡日後、大規模な自然災害に見舞われ、仕事を失うことになるBさん。中国でのエリートとしての生活を捨ててまでの渡日を決心させたのは、渡日後もそのまま勤務できることであったことを考慮すると、Bさんの心の中には激震が走ったに違いない。当時、息子の学校生活に対して大きな不安を抱えているが、「言葉が分からない」「友だちもできないかもしれない」という思いは、Bさん自身の思いでもあったであろう。また、「ハローワークの存在」も知らなかったという語りには、Bさんの無念さが読みとれる。

リストラに遭ったBさんは、英語が堪能だったこともあり再就職をする際、キャリアを生かせる仕事を探した。しかし、英語はできても日本語ができないために、そのキャリアを生かす仕事に就くことは不可能であった。自分の今まで培ってきたものを全く生かすことができない傷つきを抱えながら、家族を養うために「どんな仕事でもよい」と決心するに至ったBさんの葛藤は大きかったであろう。この語りにおいても「0から」「メンツ」という言葉には、自分をエリートだとの「メンツ」を捨て、そして、「0から」仕事を探すという「喪失と再生の物語」が読みとれる。

〈進学が思うように進まないもどかしさから、弱音を吐く C さん〉

彼女との別れの告白（1 回目のインタビュー）

C：実は、恥ずかしいこともありました。大学では彼女もいました。私と彼女の関係はとてもよかったです。でも、家族はずっと反対してました。だから、家族は日本に来ることになったら、彼女と別れることになるから…

I：日本に来るのはいい。でも C さんにとっては、彼女と別れるというのは…ちょっとつらいことだったでしょ。

C：うん、今はちょっと後悔している。もう一度チャンスがあれば…日本に来てはいない。一つ言えることは、一つ手に入るともう一つは手に入らない。

I：もし機会があれば日本に来ていないというのは…一つは…彼女と別れたくない。もう一つは社会に出たい。…大学は出たけれど、社会は経験していない。今、日本で言葉も分からない。それに大学院への道もまだまだ遠い…それで落ち込んでいるのもある？

C：後悔して、自分が選んだことに何もしないというのはいけない。自分で選んだことは自分でやり通す。

日本の大学院進学が思うように進まない C さんは、渡日に対する後悔の念を語り始めた。しかし、筆者に弱音を吐くことができたことで、「自分で選んだ」渡日や大学院進学に向かって前に進もうとする気持ちに戻れたのだと推察できる。

〈渡日の理想と現実を語る D さん〉

思い描いた日本での理想（2 回目のインタビュー）

D：日本は、漢字を使って言葉も簡単になって、顔もよく似ている…黄色人種だし、こんなに難しいと分かっていたら、来なかったかもしれません。安定したら、日本に家族全員連れてくるかなとも思っていました。

女性として生きることの困難な現実（3 回目のインタビュー）

D：中国では共同…日本だけ違います。どうしてですか？

I：少しずつ、女性の地位も上がってきているんですが…まだまだでしょうか。

D：職場でも男性が有利です。家でも…風呂も先でしょ。男が…女性の方がきれいにしないといけないうのに、絶対男が先です。だから来た当初はシャワーだけしかしませんでした。今はそんなことな

いけど…中国では、女性の方が学歴高い。女性の方が勉強も頑張る。仕事場でも地位が高い。中国では、女性の方が帰るのが遅いことがある。だんなさんが先に帰って、ごはんを作ってることもあります。でも、（日本では）台所は私の場所みたいですね。

念願叶い留学を果たし、15 年日本で暮らす D さんであるが、この間、理想通りにはいかない現実があったことは想像に難くない。インタビュー中、終始笑顔を絶やさない D さんであったが、「中国では共同…日本だけ違います。どうしてですか」と強い語気で語ることがあり、日本に対して、また男性である筆者に対しても怒りが向けられていたと考えられ、日本での 15 年の D さんの苦労が忍ばれる語りである。

3. 識字学級の意味（筆者との間で共同生成された物語）

〈A さんの識字学級の意味づけ〉

識字学級を通して日本と繋がる（3 回目のインタビュー）

I：識字学級に来てから変わったことは？

A：日本語を勉強するだけでなく…ここに来ると日本人の先生や友だちとも話すことができます。日本の文化というか…この前も料理教室ですか…巻きずしとうどんを作りました…（略）そういうことが分かるようになりました。

I：日本と繋がっているという感じですか？

A：はいそうですね。ここに来て、仕事でしんどくても、休まずに来ようと思うようになりました。

識字学級に通うことは、A さんにとって、はじめて“日本と繋がった”と思える体験であったのではないだろうか。そして識字学級は、先生や友だちと話すことを通して人との関係を築いていったり、日本文化を学ぶ場所として機能していくことになった。さらに、“しんどくても休まずに来よう”という生きる力を与えてくれる場所となっていくと考えられる。

〈B さんの識字学級の意味づけ〉

ニーズに合った場所（3 回目のインタビュー）

I：識字学級の意味は？

B：識字は個人個人のニーズに合ったというか、私が高興味あることに対応してくれるというところですね。最初は、新聞に書いてあることを理解したいと思った。それで今では、8 割位は理解できます。

B：次は日本の文学ということに興味を持った。最初は、小学生レベルの本から学んでいって…今読んでいる本は夜間の先生に紹介してもらった。風景の描写とか、人の心模様ということを理解した

かった。そういうことに対応してくれるというのが識字学級です。

初めて日本人に話した（2回目のインタビュー）

B：こんな話は…同じ中国人なら多かれ少なかれ苦労はしている。その中では話したりする。でも日本人に話すことはない。こんなに話したのは先生が初めてだ。

I：よく話してくれましたね。日本人に話さないのは？話しても理解してもらえない？

B：そうではなくて、なんでこんな考えするんやとか思われたりしないかと…

自分のために聞いてもらった（3回目のインタビュー）

I：インタビューを受けてどうでしたか？

B：こんな自分の経歴やくわしい話やなやみは、外人にはしない。でも先生と勉強したり話したりしてる中で信頼というか…聞いてもらえると…先生の研究のためというよりは、自分のために聞いてもらったように感じる。聞いてもらって自分の心の中がスッキリした。

I：ああ、実は、私もBさんの話を聞きながら、自分の人生や生き方について考えることが多くて、私こそ何か自分のためでもあったと思うんです。有り難うございました。

Bさんは、現実生活では言葉が分からないことで仕事や人間関係に支障を来していた。識字学級では、言葉を勉強するだけでなく、守られた空間（国際意識の高さや言葉遣い）の中で友だちづくりもできる「心安まる」「ニーズに合った」所であり、安心して自己表現をし、「人の心模様を理解していく」居場所としての役割があったと考えられる。さらに、「外の人」「日本人」である筆者に詳しく話すBさんの物語は、「自分のために聞いてもらったように感じる」とBさんが言うように、これからも日本という国で生きていく物語に繋がっていきと考えられる。

〈Cさんの識字学級の意味づけ〉

話し合う場としての識字学級（2回目のインタビュー）

I：識字学級に来るのはCさんにとってどう？

C：実は、毎週1回では、日本語が上達するというのは無理です。でも、話し合うことで、相手から知識をもらえる。

I：ああ、そういうことかー。コミュニケーションということですね。お互いが話し合うということがCさんにとって意味があるんですね。

C：そう、いろんなことが分かります。いろんなこと…日本の生活とか文化とかわかる。歴史とか、自分の知識とか生活の経験とかが理解できるのがいい。

語り7:しんどいことも言える場（2回目のインタビュー）

C：友だちにここを紹介してもらって、最初は日本語を勉強したいと思った。でも、だんだん来てるうちに、自分の考えは変わってきた。話すだけでなく、探していくというか、人と人との関係とか、知識の交流とかを通して明るくになりました。安心したというのが一番ぴったりです。

I：ここは安心できる場所という意味があるんですね。

C：1時間半では、日本語を覚えるというのはできない。話し合うことで、得られるものが大きくなってきた。人との繋がり方とか…

I：有り難うございました。異国の地で一生懸命生きてるCさんのこと、応援しています。それに、弱音が吐きたくなったら、また話してくださいね。

C：ありがとうございます。ここで…河合さんと一緒にこうやって話せたから、しんどいことも言えた。また、お互いによろしく願います。

Cさんにとって識字学級は、日本語を学ぶというより、日本語を学ぶことを通して、何かを「探していく」場であり、人との繋がり、日本という国との繋がりを学ぶ、つまり相互交流の場として機能していると言えよう。また、識字学級はCさんにとって「しんどいこと」も語ることができ「安心」でき、識字学級に来ると「明るく」なれる場なのであろう。インタビューの最後であるが、初めて筆者の名前を呼んで「お互いに」よろしくと締めくくっている。インタビューのプロセスがCさんと筆者との共同作業そのものであったことをCさん自身が意識している語りかもしれない。

〈Dさんの識字学級の意味づけ〉

識字学級で社会と繋がる（1回目のインタビュー）

D：日本語教室では、仕事場のことも聞くことができます。私は、ニュースにも関心があるので新聞もよく読みますが、どう読めばいいのかわからない時、ここでは聞ける人がいます。

I：ここでは日本語を学んでいるというだけでなく、社会と繋がっているという感覚があるのでしょうか。

D：そうなんです！

励ましをもらった（3回目のインタビュー）

D：最初は、不安がありました。それは、日本語が足りないから、理解してもらえない不安でした。思いや考えがちゃんと伝わるかです。でも、最初から先生との距離感が近いでした。通じるものがあるというのか…教育者同士というのもあったかもかもしれません。だから、話しやすかったし、何でも話せた。

D：3つ目は、尊敬というか、先生は一生懸命ですし、学ぼうとしている。だから、自分に励ましをもら
えているようでした。

I：それは、私もなんですよ。自分も励まされている
ようでした。貴重な時間を有り難うございました。

Dさんにとっても識字学級は、日本語を学ぶ場であるとともに「社会と繋がる場」としての意味があったと考えられる。それは、筆者と「通じ合い」「励まし合う」ことを通して実感できたことなのかもしれない。

IV 総合考察

本研究では、転機の語りを通して、渡日者が日本で葛藤を抱えながら生きていく意味を考察してきた。国際化社会とは言え、自国で人生を歩むことが大半である中であって、渡日することは彼らの人生にとって大きな転機となる。研究協力者は、「進学」「経済的安定」「自己実現」といった渡日への期待を語っている。しかし、渡日後の現実は一層厳しく、「もう一度チャンスがあれば…日本に来てはいない」「こんなに難しいと分かっていたら、来なかったかもしれません」という語りによってその気持ちが表れている。特に、Aさんは「同じ中国人なら多かれ少なかれ苦労はしている」と語っている。この語りから、渡日した外国人が言葉や文化の違いに戸惑い苦しみながら生きていることが理解可能であり、渡日者の苦労の普遍性に繋がるものと考えられる。

さて、本研究において、研究協力者全員が、「日本語が分からないことの苦労」を語っており、渡日者の最大の困難は言葉の問題であることを示唆している。しかし、言葉の問題は、ただ単に「言葉が分からず生活に支障が生じる」というものではなく、「人との繋がり」「社会との繋がり」が断ち切られる苦難・困難であり、ライフストーリー研究法を採用したことにより見出された結果と言える。

次に、識字学級が果たした役割は大きい。河合⁽²⁶⁾は、“マイナスを通してプラスが生まれる過程は、本来的「教育」そのものと言っていいのではないだろうか”とし、学校教育を「臨床」という視座から見ることを提唱している。本研究における研究協力者は、期待して渡日したにも関わらず、渡日後、「日本語が分からない」「仕事を失う」等の喪失体験を経験している。そんな中で、識字学級と出会い、人や社会との繋がりを感じながら日本での生活に希望を見出そうとするプロセスは、研究協力者と筆者との間で共同生成された物語と考えられる。

また、識字学級は、ただ知識を得るためではなく、現実社会で受ける多大な苦しみ・怒り・悲しみを癒す安全基地としての意味があった。具体的には、「安心できる」「しんどいことも言える」「通じ合える」「励ましてもらえ

る」場所であり、だからこそ「バカのように生活をしている気持ちになる」Bさんが「仕事でしんどくても、休まずに来よう」と思えるようになったのである。つまり、本研究において識字学級は、“抱える (contain) 器としての学校”⁽²⁷⁾として機能していたと考えられる。さらに、Aさんが言うように、自分たちの「外」の人間と認識していた「日本人」である筆者との間で、物語が共同生成されたことは意義深い。なぜならば、渡日者は日本社会におけるマイノリティであり、多文化共生を考える場合、その社会を構成するマジョリティである「日本人」は非当事者となる。渡日者の支援を考えていく上で、非当事者が渡日者の苦悩を知り理解することが心理的援助の第一歩になると考えるからである。

最後に、池田・仁平⁽²⁸⁾は“ネガティブな体験の肯定的な語り直しがポジティブな感情を生み出す”ことに言及している。また、江⁽²⁹⁾は、“中国人就学生は自分の精神状態の悪さを自覚せず、心理支援にネガティブな固有観念も持っているため、心理の専門職によるサポートを避ける傾向がある。その反面、身近にいる日本語学校の先生や先輩・友人のサポートを受けることが多い”として、“心理支援を行う場合、支援者は『日常的なサポート源』として心理支援を行うことが適切である”としている。このことから、筆者と研究協力者との間で共同生成された語りのプロセスは、「仕事でしんどくても、休まずに来よう (Aさん)」「…聞いてもらって自分の心の中がスッキリした (Bさん)」「一緒にこうやって話せたから、しんどいことも言えた。(Cさん)」「励ましをもらっているよう (Dさん)」というように、彼らの心理的援助に繋がったと言える。

このことから、渡日者に対して、学習内容を教示するだけではなく渡日前後の苦労や過酷な人生を生きていることに対して敬意を払いながら話を聞くことが、心理的援助に繋がり多文化共生の一助となることを示唆された。

V 今後の課題

本研究では、筆者と研究協力者の関係の中で紡ぎ出される物語を検討することができた。しかし、この結果は少数の対象者から得られたものであり、一般化できない。本研究における研究協力者は渡日前、自国で高等教育を受けていた方たちであり、「語る」ことや「自己を振り返る」ことが容易だったのかもしれない。実際、「当事者でない人に気持ちを分かってもらえない」「ただ必死に生きてきただけ。それだけ。」とインタビューに応じてもらえないこともあった。今後は他の事例についても同様の分析を進めていくこと、また量的研究も行うことによって、研究の一般化に繋げていく必要もあると考えられる。さらに、心理的援助を潜在的に求めている識字学級に通う渡日者に対する、援助システムの構築に向けた研究も今

後の課題である。

一文 献一

- (1) 法務省入国管理局「平成 27 年 6 月末現在における在留外国人数について（確定値）」
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00054.html（閲覧日：2016 年 5 月 4 日）
- (2) 全国識字学級実態調査実行委員会『2010 年度・全国識字学級実態調査報告書』, 2011
- (3) 棚田洋平「日本の識字学級の現状と課題「2010 年度・全国識字学級実態調査」の結果から」『部落解放研究』(192), pp.2-15, 2011
- (4) 山田 泉「在住外国人の社会参加を目指してー川崎市の「識字学級」を考えるー」『生涯学習とキャリアデザイン』(5), pp.41-48, 2008
- (5) 福島知子「大阪府の識字・日本語教室の現状と課題ー大阪府教育委員会「識字学級等調査」からー」『部落解放研究』(159), pp.58-66, 2004
- (6) 江 志遠「日本語学校に在籍する中国人就学生のメンタルヘルスに関する 臨床心理学的研究（博士論文）」, 九州大学, 2013
- (7) 李 健實「外国人労働者のメンタルヘルスと心理的援助の現状と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』(52), pp.403-410, 2012
- (8) 竹山典子「在日外国人生徒への心理的援助のあり方ー高校への適応を果たした事例からの考察ー」『異文化間教育』(27), pp.62-74, 2008
- (9) 大橋敏子「外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入ーナラティブ・アプローチの視点から」『留学生教育』(16), pp.99-106, 2011
- (10) 一條玲香「在住中国人女性の異文化適応における困難とサポート要因」『心理臨床学研究』33 (1), pp.59-69, 2015
- (11) 再掲 (7)
- (12) 大西晶子「在住外国人に対する心理援助ー実践の課題と心理援助専門家の役割に注目してー」『コミュニティ心理学研究』18 (1), pp.93-108, 2014
- (13) 再掲 (12)
- (14) 河合篤史「識字学級に通う中国人留学生が語るライフストーリーに関する考察ーライフストーリー研究を用いてー」『環太平洋大学短期大学部紀要』(26), pp.19-28, 2014
- (15) やまだようこ「展望 人生を物語ることの意味ーなぜライフストーリー研究か？」『教育心理学年報』(39), pp.146-161, 2000
- (16) 再掲 (15)
- (17) 桜井 厚「インタビュー・テキストを解釈する」『桜井 厚・小林多寿子編ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房, pp.129-183, 2005
- (18) 能智正博「質的研究がめざすもの」『伊藤哲司・能智正博・田中共子 編 動きながら識る, 関わりながら考える 心理学における質的研究の実践』ナカニシヤ出版, pp.21-36, 2005
- (19) 大久保孝治「ライフストーリー分析ー質的調査入門」学文社, pp.20-27, 2008
- (20) 川野健治「質的研究を見通すーデータ収集と分析」『能智正博 川野健治 編 事例から学ぶはじめての質的研究法 臨床・社会編』東京書籍, pp.58-66, 2007
- (21) 再掲 (17)
- (22) 再掲 (15)
- (23) 桜井 厚「リアリティの共同構築」『インタビューの社会学ライフストーリーの聞き方』せりか書房, pp.139-171, 2002
- (24) 野村晴夫「構造的ー貫性に着目したナラティブ分析：高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討」『発達心理学研究』16 (2), pp.109-121, 2005
- (25) 杉浦 健『転機の心理学』ナカニシヤ, pp.1-12, 2004
- (26) 河合隼雄『子どもと学校』岩波書店, pp.8-19, 1992
- (27) Youell, B (2006). 『THE LEARNING RELATIONSHIP: Thinking in Education.』 London: Karnac Books Ltd.
(ヨーエル, B. 平井正三 (監訳) 鈴木誠 (訳) 『学校現場に生かす精神分析 [実践編]ー学ぶことの関係性ー』岩崎学術出版社, 2009)
- (28) 池田和浩・仁平義明「ネガティブな体験の肯定的な語り直しによる自伝的記憶の変容」『心理学研究』, 79 (6), pp.481-489, 2009
- (29) 再掲 (6)

